

I. 一般的なイディオムと*Lexicon*のイディオムについて

西尾美由紀

「イディオム」と言った場合、一般的に定義されるイディオムと *Lexicon* で使われるイディオムの定義は少し異なる点があります。この点について、今日はお話したいと思います。¹

1. イディオムとは？

山本博士が作成されたカードには、ディクンズに特有な慣用表現やイディオムが多く見られます。しかしながら、*Lexicon*にあるイディオムは一般的なイディオムと少し違います。それでは、まず、イディオムとは一般的にどのようなものを指すのか、見ていきましょう。A. P. Cowie はイディオムを次のように定義しています。

イディオムというのは、比較的、固定度の高い多重語連結単位 (multiword unit) という上位類の一部である。しばしば言われるように、イディオムは、意味的に不透明(opaque)な語結合(word-combination)であり、全体の意味は構成要素各部の意味の総和と同じではない。(Cowie, ed. 1998: , 南出・石川監訳 2009 : 243)

たとえば、“kick the bucket” という表現を見てみましょう。この表現には「バケツを蹴る」という文字通りの意味と「死ぬ」という 2 つの意味があります。「バケツを蹴る」という場合は、kick (蹴る) と the bucket (バケツ) という文字通りの意味が残っています。しかしながら、「死ぬ」という意味の場合は、「蹴る」や「バケツ」という意味はまったく残っていません。

また、Fraser (1970) や Michiels (1975) らの他の研究者は、イディオムであるかどうかを決めるのは、その表現が統語的操作を受けるかどうかによると指摘しています。つまり、受動態が作れるかどうか、構成要素の挿入が出来る

¹ 本稿は大阪大谷大学英文学会で発表したものに、第 5 1 回広島英語研究会での発表内容を加え、加筆修正したものである。

かどうか、強調構文を作るときのようにイディオムを分裂させることができるかどうかなどにより決まるということです。例えば、次のような受動態の文 “The bucket was kicked.” に書き換えると、「バケツは蹴られた」という意味になり、「死ぬ」という意味では受動態にすることはできません。

秋元実治は、『文法化とイディオム化』（2002）の中でイディオムの特徴として次の3つの点を挙げています。

- (1) ある句の意味が構成する語と語の意味を含ませたものとは違った意味になる
- (2) 統語上の変形を許さない
- (3) イディオム内の成分の語彙的代用はできない

(1)については、先ほど“kick the bucket”について述べましたが、別の例を見てみましょう。例えば、“saw logs”というイディオムの構成要素は saw（のこぎりで切る）と logs（丸太）です。構成する語の意味は、「のこぎりで丸太を切る」という意味になり、「いびきをかく」というイディオムの意味にはなりません。また(2)について、“The bucket was kicked by Sam.”という文では「バケツはサムによって蹴られた」という意味においては成り立ちますが、「死ぬ」という意味では受動態は成り立ちません。(3)では、“have a crush on”（～に首ったけである）という表現の中の crush という語を smash に変えると、全く別の意味になってしまいます。

では、*Lexicon* におけるイディオムを山本博士はどのように定義されているのかを見てみましょう。

Idioms are expressions which are **delimitable units** of a language, which may happen to be single sounds, single words, phrases, or sentences. Delimitation takes place according to the linguistic sense of those who use the language as their mother tongue, this sense being at once psychological, social and historical. These three elements are unified in the sense of peculiar familiarity, which may or may not be strange to those who do not use it as their native language. (Yamamoto 1950: p.394)

山本博士の定義によると、イディオムとは、「それ以上分けることのできないまとまりを持つ表現」のことを指します。それ以上分けることが出来るかどうかは、英語を母国語として使う人々の言語感に委ねられます。そうした感覚は、心理状態、社会、また歴史などの影響を受けて変化します。これらの3つの感覚が「特有の親しみやすさ (peculiar familiarity)」を伴って作られたイディオムは、時に英語を母国語としない私たちにとっては、違和感を覚えることがあります。

では、“delimitable unit”とはどういうものなのか、考えてみましょう。たとえば、次のような例文があります。

... that blessed Star which led the Wise Men to a poor abode.

(Christmas carol, 1)

これは、『クリスマスキャロル』からの引用で、「賢者を貧しい家に導いた聖なる星」という意味になります。文中の“The Wise Men”を辞書で調べると、定冠詞の **the**、形容詞 **wise**、名詞 **men** の3つの要素に分析することができます。それぞれ「その」「賢い」「男性たち」を意味していますが、別々に分けると、「賢者」という意味を導き出すことはできません。文法的にみると、これらの3つの要素の結合の仕方は多様です。たとえば、“the men”, “the wise men”, “wise men”のように、自由に他の語と結びつくことができます。しかしながら、“the men” や “wise men”はそれぞれ、「男性たち」「賢い男性たち」を意味することはあっても「東方から来た3人の賢者」の意味は失われてしまいます。*Lexicon* の観点からみると、“the wise men”は「東方から来た3人の賢者」のことを指しており、定冠詞 **the** あるいは形容詞 **wise** がなければ、「賢者」を意味することができません。そう考えると、“the wise man” がこれ以上小さくすることのできないまとまり (=delimitable unit) ということになります。これを山本博士はイディオムであると定義しています。

2. イディオムの種類

イディオムには、動詞を用いたイディオムや、副詞、名詞、形容詞を用いたイディオムなど使われている品詞によって分類することができます。

2.1. Verb Idioms

まずは、動詞のイディオムを見てみましょう。“To peg away”は「せっせと活発に動く(to work out consistently)」という意味です。下の例にあるように、ほとんどの場合、“peg away”の形を変えずに使われます。ヴァリエーションがないことから、イディオムとして定着しているということもできます。

“**Peg away**, Bob,” said Mr. Allen to his companion, encouragingly. P 30 / (Dick) “Why should a grandson and grandfather **peg away** at each other with mutual violence...?” CS 2 / Mr. Jonas...requested his father to signify to that venerable person that he had better “**peg away** at his bread.” MC 11

別の例を見てみましょう。“To get up steam”は *OED* の steam を見ると “In phrases descriptive of the working of a steam-engine, esp. of a locomotive; often used fig.; eg. ...to get up, put on steam, to blow off, shut off, turn off team, under steam, with steam up...”²と定義されています。つまり、steam は蒸気エンジンや蒸気機関車に関連するフレーズで用いられており、その際用いられる動詞は多様で、get up の他に、put on, blow off, shut off, turn off などと用いられるとあります。実際、ディケンズの引用を見ても、get up の他にさまざまな動詞が用いられています。ディケンズでは文字通りの意味で用いられるのはもちろん、比喩的に “to work oneself into energy, to summon energy for special effort” (精を出す) という意味で用いられることもあります。

...all five young ladies having, in the figurative language of the day, a great amount of **steam** to dispose of, the altercation would...have been a long one... MC 4 / ...I have four (slips) to write to close the chapter; and, as I foolishly left them till this morning, have **the steam to get up** afresh. Life I 130 / ...I must buckle-to again and endeavour to **get the steam up**. Life I 153 / With my steam very much up, I find it a great trial to be so far off from you... Life II 125 / I see no hope of finishing before the 16th at the earliest, in which case the **steam** will have to be put on for this short month. Life II

² *OED*, s.v. steam, n. 7.d.

steam という語は、ディケンズの作品中 165 回用いられていますが、そのうち get up と共起しているのは 7 例のみです。その中には、語順が入れ替わり (ex. get the steam up)、steam という名詞がイディオム get the steam up から離れて the steam to get up と変化する例もあります。また、先に述べたように、get up という動詞句が別の動詞句(dispose of, put on など)に変わることもあり、いわゆる一般的なイディオムとして定着しているとは言えません。18 世紀³および 19 世紀⁴の作品を見ると、steam という語自体の頻度が 36 例と極めて低くなっています。一体なぜディケンズの作品には steam が多く用いられているのでしょうか。そもそもディケンズは鉄道への関心が非常に高いことで良く知られており、実際に鉄道が出てくる作品が多くあります。また、歴史的観点から見ると、蒸気船(steam boat)が作られたのが 18 世紀末、スティーブソンが蒸気機関車を発明したのも 19 世紀初めであり、18 世紀には steam という語があまり用いられていなかったのだらうと推測できます。19 世紀においても、他の作家にとってはまだ蒸気機関車は珍しいものだったかもしれませんが、ディケンズにとっては馴染み深いものであったため、比喩的な意味に発展させたということが出来るでしょう。

一般的なイディオムでは、このように語を入れ替えることが出来るものはイ

³ 扱った 18 世紀作品は以下の通りである。 **Daniel Defoe:** *The Life, Adventures, and Piracies of the Famous Captain Singleton, A Journal of the Plague Year, The Military Memories of Capt. George Carleton, The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders, Robinson Crusoe* / **Henry Fielding:** *A Journey from this World to the Next, Amelia, The Life and Death of Jonathan Wild, the Great, The History of the Adventures of Joseph Andrews and of his Friend Mr. Abraham Adams, The History of Tom Jones, a Foundling.* / **Oliver Goldsmith:** *The Vicar of Wakefield* / **Samuel Richardson:** *Clarissa Harlowe, or the History of a Young Lady.* / **Tobias Smollett;** *The Adventures of Peregrine Pickle, The History and Adventures of an Atom, The Adventures of Ferdinand Count Fathom, The Expedition of Humphry Clinker, The Life and Adventures of Sir Launcelot Greaves, The Adventures of Roderick Random, Travels through France and Italy* / **Laurence Stern:** *A Sentimental Journey through France and Italy, The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* / **Jonathan Swift:** *Guillver's Travels into Several Remote Nations of the World, The Journal to Stella*

⁴ 扱った 19 世紀作品は以下の通りである。 **Jane Austen:** *Emma, Mansfield Park, Northanger Abbey, Persuasion, Pride and Prejudice, Sense and Sensibility* / **C. Bronte:** *Jane Eyre, The Professor, Villette* / **A. Bronte:** *Agnes Grey* / **E. Bronte:** *Wuthering Heights* / **Wilkie Collins:** *After the Dark, The Moonstone, The Woman in White* / **George Eliot:** *Adam Bede, Brother Jacob, Daniel Deronda, Middlemarch, Silas Marner, The Mill on the Floss* / **Elizabeth Gaskell:** *Cranford, Mary Barton, Sylvia's Lovers* / **W.M. Thackeray:** *The Luck of Barry Lyndon, Vanity Fair* / **Anthony Trollope:** *Barchester Towers, Can You Forgive Her?, Dr. Thorne, The Eustace Diamonds, Phineas Finn, The Warden*

ディオムとして定義されていませんでしたが、*Lexicon* では、このような様々なヴァリエーションが見られる、イディオムとして発達途中のものも含まれています。

2. 2. Adverb Idioms

それでは、前置詞句など副詞の働きをするイディオムの例をいくつか見てみましょう。 **in so many words** は 文字通りの意味では、「とても多くの言葉で」となりますが、文字通りの意味が薄れるイディオムでは、「率直に、簡潔に」という意味になります。

...the Lord mayor had threatened **in so many words** to pull down the old London Bridge, and build up a new one. B Scenes 4 / Miss Murdstone...told me, **in so many words**, that I was free to walk in the garden...; and retired... DC 4 / ...the King...addressed them when they met, in a contemptuous manner, and just told them **in so many words** that he had only called them together because he wanted money. CH 33

2つ目の例文を見てみましょう。*David Copperfield* の Miss Murdstone は、主人公 David の継父の Mr. Murdstone の姉で、非常に冷酷な女性として描かれています。この Miss Murdstone が私（幼い David）に向かって「庭を自由に歩いても良い」と **in so many words** で言います。この場合、**in so many words** は「率直に」というよりもむしろ、「素っ気なく、ぶっきらぼうに」David に向かって話していると考えることができます。Miss Murdstone の冷淡な口ぶりを容易に想像することができます。

このイディオムも、基本パターンは[**in the + something + words**]ですが、**something** の箇所にも、**so many** だけでなく、**three, five, six** などの数字が入ることがあります。たとえば、“Now I have an idea (not easily explainable in writing but told **in five words**)” という引用文では、「書くと説明は難しいが、“**in five words**”で話した」とありますが、ここでも、文字通り「5語で話した」のではなく、「簡潔に」話したと考えられるでしょう。

次の例は、前置詞のない名詞句が副詞的な働きをするイディオムです。turn

and turn about が動詞や名詞としてではなく、副詞句のように「順に、交互に」という意味で用いられています。

(Mrs. Gamp) “...Mrs. Prig and me has nussed (‘nursed’) together, **turn and turn about**, one off, one on. “ MC 25 / starling and I were Cook’s Mate, **turn and turn about**. XS Haunted

もともと動詞句を、turn を繰り返さず単独 (=turn about) で用いていたものが品詞転換され、名詞句として用いられるようになります。それがさらに発展して副詞的に用いられるようになったのが上の例です。

Martin Chuzzlewit [以下 MC]では、turn を change に変え、change and change about というヴァリエーションで用いています。「let + 人」の後に来ているので、この change が動詞として用いられていることにすぐに気づくと思います。

To let us change and change about.

もう1カ所、ディケンズの作品で change and change about が用いられている箇所があります。*David Copperfield* からの次の引用を見てください。

(Steerforth) “... now a man’s a judge, and now he is not a judge; now he’s one thing, now he’s another; now he’s something else, **change and change about**.” DC 23

MC からの例とは異なり、副詞的に用いられています。「今判事をしているかと思うと、もう判事じゃなかったり、今何かしていると思うと、もう別のことをしている」というように、次々に変わることを表すのに、change and change about と表現しています。さらなる調査は必要ですが、turn and turn about の類推 (analogy) により用いられており、イディオムの発達過程の1面を見ることができたということもできるでしょう。

さて、次は形容詞的な働きをするイディオムを見ていくことにしましょう。

2. 3. Adjective Idioms

形容詞のイディオムは2つの語が alliteration (頭韻) や rhyme (脚韻) によって[A and B]のパターンで、用いられることがあります。

--the people are as **cool and collected** as if nobody were going out of town... B Scene 15

No man-of-war was ever kept more **spick and span** from careless touch.

cool and collected (落ち着き払った)、spick and span (こざっぱりした) はどちらも頭韻を踏んでいる例ですが、rough and tough (「頑強な」の意) のように脚韻を踏んでいるものもあります。これらのイディオムは、ある程度固定した表現で、あまりヴァリエーションが見られませんが、次の例 jog-trot にはディケンズらしいヴァリエーションがあります。jog-trot は、馬がパカパカ歩くイメージから「単調な」という意味になり、way, life, style など様々なものを修飾しています。

...we are a humdrum couple, going on in a **jog-trot** sort of way...
Cricket 3 / ... it has become a very **jog-trot**, monotonous, tiresome sort of business... *Pictures from Italy* / (a gentleman) “I have good reason to believe that a **jog-trot** life, the same from day to day, would reconcile one to anything.” DS 33 / “Therefore, “ says Mr. Tulkinghorn, pursuing his case in his **jog-trot** style, “I have much to consider.” BH 41

ディケンズの作品中、jog-trot が 23 回使われているのに対し、18 世紀、19 世紀の作品では 8 回しか使用されていません。実際にディケンズの例を見ると、特に前期の作品では jog-trot の類義語である humdrum, monotonous と共起しています。当時の社会では、jog-trot がまだ定着していなかったため、読者がその意味を理解しやすいように、類義語を反復したと考えることもできます。しかしながら、後期になると jog-trot にヴァリエーションが見られます。

(Richard) “It’s rather **jog-trotty** and humdrum. But it’ll do as well

as anything else!” BH 17 (‘jog-trotty’, nonce-word, of a jog-trot character. This is the only instance quoted in *OED*)

この引用例では、jog-trot を jog-trotty に変えています。*OED*には「臨時語」(nonce-word)として引用されています。このようにある程度、固定したイディオムに様々なヴァリエーションを創造していくのがディケンズの最も得意とするところで、ディケンズの作品中には豊富に見られます。

2. 4. Noun-Idioms

さて、最後に名詞としての働きを持つ Noun-Idioms を見ていきたいと思えます。Noun-Idioms としてディケンズの作品中で代表的なのは “line”イディオムですが、この “line”イディオムについては、これから堀先生が詳しく説明してくださると思えますので、堀先生にお任せしたいと思えます。